

コリント人への手紙第二3章 「御霊に仕える務め」

1A 心に書き記された推薦状 1-3

2A 新しい契約に仕える者 4-18

1B 神からの資格 4-6

2B さらなる栄光 7-11

1C 生かす御霊 7-9

2C 永続する栄光 10-11

3B 覆い 12-18

1C モーセの顔の覆い 12-15

2C 鏡に映される主の栄光 16-18

本文

コリント人への手紙第二3章を開いてください。パウロが今、コリントの人たちの一部から信頼を失いかけているという背景を思い出してください。そこで、自分がイエス・キリストの使徒であることを弁明しなければいけなくなりました。それは、自分のためではなく、彼らのためであり、彼らの教会が、パウロの働きによって神が育て上げてくださったのですから。

彼らの一部がパウロに信頼を失いかけていたのは、背後に偽使徒たちがいたからに他なりません。パウロの働きの後にやって来て、自分たちはエルサレムから来たと言ったり、ペテロやヨハネ、ヤコブなどの大使徒たちから信任状を受け取っているなどと言っていたかもしれません。そして、パウロの働きを貶めることによって、自分たちがコリントの教会を支配するように仕向けていったのです。その結果、パウロの宣べ伝えていた恵みの福音から離れて、もっと何か違うものが大事だと思わせ、キリストの十字架ではないものを誇らせようとしていました。モーセの律法自体は悪いものでは何でもないのですが、割礼を異邦人も受けなければいけないとか、そうやって肉を誇らせるような偽教師が、パウロが宣教の働きをしていた時に多くいました。

そこにあるのは、見た目の資格です。人の目から見たら、とても良さげなことを話します。あるいは、権威のある人や団体からの信任状とかを持って来ます。その一つ一つ、部分部分は正しいことを言っているかもしれません。異端の人たちは、それが得意です。聖書知識は非常にあります。ですが、そこにはその人の生活がありません。命がありません。ありのままの姿がありません。繕っているのですね。そうした、見た目によく見えるような偽使徒たちに対して、自分たちがどのような務めがあるのか、それを説明しているのが 3 章です。パウロは、御霊の仕えている者であるとか、新しい契約に仕えている者と言って弁明、説明しています。

1A 心に書き記された推薦状 1-3

¹ 私たちは、またもや自分を推薦しようとしているのでしょうか。それとも、ある人々のように、あなたがたに宛てた推薦状とか、あなたがたからの推薦状とかが、私たちに必要なのでしょうか。

当時、各地にある教会を巡る預言者や伝道者は、推薦状をもって行きました。今の教会以上に、それぞれの集まりは各地に分散していました。一つの教会に一人の指導者というよりも、複数の長老や牧者がいて、また伝道者や預言者など巡回している人々もいます。例えば、ロマ書において、その手紙を女執事フィベが携えていくことになりましたが、彼女を「16:1 私たちの姉妹で、ケンクレアにある教会の奉仕者であるフィベを、あなたがたに推薦します。」と推薦しています。けれども、コリントの人たちに、まだ信頼関係のない人であるかのように自分自身の推薦状を持っていく必要があるのでしょうか？と聞いているのです。

² 私たちの推薦状はあなたがたです。それは私たちの心に書き記されていて、すべての人に知られ、また読まれています。

パウロが推薦状を持っていかなければならないということ自体が、馬鹿げたことです。彼らこそが、自分が使徒であることを証明する実であります。パウロの働きによって、確かに神は彼らを育ててくださいました。そうした実によって、見分けることができます。イエス様は、偽預言者はその実によって見分けなさいと言われましたが、そうした形式や言葉のごまかしに惑わされるのではなく、確かに実として残っているもので見分けなさいということなのです。

一つ、「心」に書き記されていると言っています。御霊によって、確信として与えられているのです。パウロは、自分が確かに神に選ばれた使徒であることを、彼らの間でキリストがあがめられているということによって、心に確信があるのです。それから、「すべて」の人に知られて、読まれているということです。騒ぎを起し、争いを引き起こす人たちは、あたかも自分たちの主張をみな支持していると思わせます。けれども、人間的な言い方をすれば、そのような騒がしい人々は少数で、多数は、サイレント・マジョリティー、声は出していないけれども分かっているのです。コリントの人たちが信じたのは、神の恵みの福音、イエス・キリストの福音です。それは分かっているのです。

³ あなたがたが、私たちの奉仕の結果としてのキリストの手紙であることは、明らかです。それは、墨によってではなく生ける神の御霊によって、石の板にではなく人の心の板に書き記されたものです。

「キリストの手紙」というのは、すばらしいですね。キリストがいかに働いておられるのか、語っておられるのかは、彼らを見たら分かるということです。エペソ 2 章には、「実に、私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。(10 節)」とあります。

神の作品というのは、神のポエムとも訳せるところです。神が書いてくださっている詩です。

そして、このような働きは、御霊によって行われているということ、パウロはここから強調します。「墨によってではなく生ける神の御霊によって」と言っていますね。自由に働かれる御霊がおられて、この方の導きによって私たちの間に信頼関係が培われていきます。みなさんも、イエス・キリストを福音を信じたというところで、御霊に任せてください。間違っても知識と呼ばれるものに、惑わされないでください。その中で自然と、御霊にある信頼関係が築かれていきます。

私が思い出すのは、救われて間もない頃、大学生だった時に自宅にエホバの証人の人たちが布教のために訪問してきました。その聖書の知識は膨大です。非常に熱心に聖書研究をしていますから。けれども、あるところでエホバの証人の人への対応ということで読みました。「救われたことを、証してみなさい。」そうです、救われたことを証することはできます。それで話しました。相手の人にも、そうしてみてくださいとお願いしましたところ、いや～ありませんでしたね。それだけ聖書を膨大に知っているのに、救われたことを話せないのです。つまり、救われていないのです。救われたいと願って求道しているのかもしれませんが、救われていないのです。ですから、その聖書の知識というものも、どんなに見た目は正しいように見えても、根本のところ歪んでいることが分かります。そうした表向きの敬虔さが、内実としての敬虔さを表していませんでした。こうしたことが、墨によってではなく、生ける神の御霊によって、ということでもあります。

そして、「石の板にではなく人の心の板に書き記されたものです。」と言っています。墨の話から、石の板ということに話を移していますが、これは、モーセが主から授かった律法のことです。シナイ山において、四十日間、モーセは神と顔と顔を合わせて語りました。モーセは、主ご自身の指で書かれた石の板をたずさえて、シナイ山から降りていきました。ところが、彼らは金の子牛を造って、その周りで戯れていました。戒めが与えられたら、すでにその戒めを破っていたのです。こうして、イスラエルは、戒めが与えられたら、その戒めに背いていくことが、その歴史の中で明らかになっていきました。そのために、主が、約束の地から彼らを抜き取ることを語り始めます。

バビロンによるエルサレム破壊と、ユダヤ人の捕囚を目の前にして、主が預言者エレミヤに次の約束を与えられました。「31:31-33 見よ、その時代が来る——【主】のことば——。そのとき、わたしはイスラエルの家およびユダの家と、新しい契約を結ぶ。32 その契約は、わたしが彼らの先祖の手を取って、エジプトの地から導き出した日に、彼らと結んだ契約のようではない。わたしは彼らの主であったのに、彼らはわたしの契約を破った——【主】のことば——。33 これらの日の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうである——【主】のことば——。わたしは、わたしの律法を彼らのただ中に置き、彼らの心にこれを書き記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。」

石の板に書き記された律法を守ろうにも、むしろそれに違反することが明らかになりました。問題は律法そのものにありません。律法は聖なるもので、良いもの、正しいものです。そうではなく、心に包皮があると言ったらよいでしょう、罪によって鈍くなっていて、神と人との間の隔たりがあって、それで守ろうにも、むしろ、その律法によって罪に定められてしまうのです。しかし、新しい契約のために、わたしが流す血であるとして、イエス様が最後の晩餐でぶどう酒を弟子たちに飲ませましたね。主が血を流されたことで、私たちの心にある罪が清められ、御霊によって洗われました。それによって、神に命じられることが、新しい心で守ることができるようになったのです。それが、ここに書かれている、「律法を彼らのただ中に置き、彼らの心にこれを書き記す。」ということです。偽使徒たちは、墨で書いたものや、また律法を強調していましたが、恵みの福音を信じる者たちには、御霊によって、心の中にすでに律法が書き記されているのです。

2A 新しい契約に仕える者 4-18

1B 神からの資格 4-6

⁴ 私たちはキリストによって、神の御前でこのような確信を抱いています。⁵ 何かを、自分が成したことだと考える資格は、私たち自身にはありません。私たちの資格は神から与えられるものです。⁶ 神は私たちに、新しい契約に仕える者となる資格を下さいました。文字に仕える者ではなく、御霊に仕える者となる資格です。文字は殺し、御霊は生かすからです。

パウロは、「確信を抱いています」と言っています。それはどのような確信かということ、神から与えられた資格で、新しい契約に仕える資格をくださったということです。覚えていますか、彼は、自分たちの福音宣教の働きで、信じる者には永遠のいのちが与えられ、拒む者たちには滅びが定められるという、大きな権威が与えられていることに畏怖の念を抱いていました。「このような務めにふさわしい人は、いったいだれでしょうか。」と言いました(3:16)。ふさわしい人、資格のある人はだれもいないのです。けれども、神が恵みによってくださったのです。それを受けることのできるような資格は自分の内にはありません。けれども、恵みで与えられました。すべてのキリスト者が、信仰によってそうなのです。新しい契約に仕える者とされています。

「文字に仕える者ではなく、御霊に仕える者となる資格です。」と言っているところ、説明が必要です。ここの文字は、律法の文字のことです。先ほど石の板の話のパウロがしていましたね。それに対して、御霊に仕えるとは、御霊によって新しく生まれ、心が洗われて、罪から清められて、その一新された思いによって、主に仕えることです。もちろん、神のことばそのものを否定しているではありません。しかし、新しく御霊によって生まれたので、神のことばを守る時に、それがもはや、自分の義を立てるためではなく、キリストについていく、生きた関係の中で、愛によって従うために、与えられたものです。午前礼拝でお話ししました。知識における聖書研究のためのみことばではなく、主に語られるためのみことばが大事です。主に語られたら、その声に聞き、従います。

そして、「文字は殺し、御霊は生かすからです。」と言っています。律法の文字が与えられてから、罪がますます罪深い者として明らかにされました。それで、自分は罪に定められており、死に値することも知りました。しかし、キリストが律法の要求、死ななければいけないという要求を、十字架の死によって満たしてくださいました。そして、信じる者に御霊を下されたのです。エレミヤの預言では心の板に律法が書き込まれるということですが、それは御霊によって行われることを、エゼキエルが預言しています。「エゼ 36:26-27 あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を与える。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。27 わたしの霊をあなたがたのうちに授けて、わたしの掟に従って歩み、わたしの定めを守り行うようにする。」新しい契約には、信じる者に対して御霊による心の一新の約束があるのです。

2B さらなる栄光 7-11

1C 生かす御霊 7-9

⁷ 石の上に刻まれた文字による、死に仕える務めさえ栄光を帯びたものであり、イスラエルの子らはモーセの顔にあった消え去る栄光のために、モーセの顔を見つめることができないほどでした。そうであれば、⁸ 御霊に仕える務めは、もっと栄光を帯びたものとならないでしょうか。

パウロの評価を引き下げる者たちは、彼のみすぼらしさなど、いろいろ否定的なことを語りました。そして自分たちにあるものを見せびらかしていたことでしょう。そこで、彼らがより頼んでいた律法について、そこにある栄光と、新しい契約に仕える務めにある栄光は、後者がはるかにまさっていることを話しています。

主がシナイ山で律法をモーセに与えられた時に、そこには神の栄光がありました。稲妻や雷、黒雲、角笛などが主が降りて来られる時にあります。モーセが降りてきたら、彼は長いこと、顔と顔を合わせて主と語っていたので、主の栄光によって、彼の顔が輝いていました。イスラエル人は初め、彼のところに近づけなかったのです。このように律法には、神の栄光があります。律法には、神の聖さ、正しさ、良さが証しされています。知恵があります。知識があります。主への恐れがあります。詩篇 119 篇を見てみてください、その一節一節が、主のおきて、仰せ、教え、証しと、いろいろな表現で律法の大切さが書いてあります。律法には、神の栄光が反映されているのです。

けれども、「死に仕える務め」だとパウロは言います。先ほど話したように、モーセがシナイ山から降りてきた時に、早速イスラエルの民は金の子牛を拝み、戯れており、それによって殺された者たちが大勢出ました。その後、戒めが与えられたのに、その戒めに逆らう者たちがいろいろ出て来て、死んでいったのです。ついに、カデシュ・バルネアでは、イスラエルの民全体が不信に陥り、エジプトに戻ると言い出したので、その世代すべてが荒野でさまようようにされて、荒野で死んでいくようにされたのでした。ですから、死に仕える務めなのです。

それに対してパウロは、「御霊に仕える務めは、もっと栄光を帯びたものとならないでしょうか。」と言っています。罪の中に死んでいた者たちが、御霊によって新たに生かされるのです。このような務めなのだから、なおさらのこと栄光を帯びているということです。これは、パウロは大胆に言っています。ユダヤ人にとって、モーセこそが最も偉大な預言者であり、律法を受け取った神のしもべです。それ以上の栄光を帯びていると大胆に言っています、けれども、それは彼が、使徒たちがモーセよりも優れているということではなく、キリストがはるかに優れた方だからです。

イエス様ご自身も、似たようなことを言われました。バプテスマのヨハネについて、群衆にお語りになった時です。「マタ 11:11 まことに、あなたがたに言います。女から生まれた者の中で、バプテスマのヨハネより偉大な者は現れませんでした。しかし、天の御国で一番小さい者でさえ、彼より偉大です。」バプテスマのヨハネは、預言者たちの中でも最も偉大です。なぜなら、他の預言者はメシアが来られることを前もって告げましたが、ヨハネはすでに来られたことを告げているからです。けれども、メシアを信じて受け入れた者たちが、天の御国に入ります。この者たちは、キリストのものとなったゆえに、ヨハネよりも偉大になっているのです。ヨハネはキリストについて証しましたが、キリスト者はキリストに結ばれた者として、いわば主演です。ヨハネは、いわば花婿の友人ですが、教会は花婿の花嫁です。どちらが偉大か分かりますか。

⁹ 罪に定める務めに栄光があるのなら、義とする務めは、なおいっそう栄光に満ちあふれます。

律法は、死に仕える務めではありますが、罪に定める務めでもあります。律法によって、人は罪に定められ、死にます。けれども、御霊に仕え、新しい契約に仕える者は、「義とする務め」なのです。キリストの十字架を宣べ伝え、よみがえりを宣べ伝えます。そうすれば、信じる者は義とみなされます。例えば、死刑執行の看守は、とても大切な働きです。けれども、仮に、死刑に値する犯罪を行った者が、まるで違う人間になったら、どれだけすばらしいでしょうか？人が罪から離れるようになれば、死刑制度さえ必要なくなりますね。イエス様が戻られて、神の国が立てられなければ無理ですが、ですから、後者のほうが、なおいっそう栄光に満ちあふれますね。

このように私たちが、恵みによってこれだけ大きな務めを任されているということは、普段の生活では、そうみられることはないですね。むしろ、人目につくようなことを行っている人々が、格好いいということになります。けれども、そんなことではないのだよ、ということです。私たちは、救われるために、ただ主イエス・キリストの福音を信じ、受け入れなさいと勧めます。そして、聖書をただ普通に、素直に読んでいけばいいのだよ、と勧めます。その他は御霊が行ってくださるのです。この単純さに、人の肉は耐えられません。もっと何かをやれば、こんなことが起こる、というようにしてほしいのです。それで、いろんな色付けを付けようと思います。いかに、私たちが健康になれるでしょうか？教会に人がもっと来ることができるでしょうか？日本民族は、神の選ばれたユダヤの民だったのです！とか。何か違うことに取り組みせて、イエス様とイエス様の福音にだけある恵み、

信仰によって御霊が働かれるという自由、それを奪い取ろうとするのです。

2C 永続する栄光 10-11

¹⁰ 実にこの点において、かつては栄光を受けたものが、それよりさらにすぐれた栄光のゆえに、栄光のないものになっているのです。¹¹ 消え去るべきものが栄光の中にあったのなら、永続するものは、なおのこと栄光に包まれているはずです。

律法の役割について、ガラテヤ書が明確に教えています。律法がなければ、罪が罪と明らかにされません。律法があるので、罪を犯したら死ななければいけあにことがはっきりしました。ゆえに、律法によって、キリストの十字架が、神の義の現れであることがはっきりしたのです。ガラテヤ書では、それを「キリストに導く養育係」と呼ばれています。「ガラ 3:24-25 こうして、律法は私たちをキリストに導く養育係となりました。それは、私たちが信仰によって義と認められるためです。25 しかし、信仰が現れたので、私たちはもはや養育係の下にはいません。」このように、キリストを信じる信仰に、律法が導いてくれました。したがって、もはや律法の下にはいなくなったのです。

ここから分かることがあります。かつて栄光を受けたもの、というのは、モーセに律法が与えられていて、そこにある栄光がありました。しかし、それ以上に輝いている栄光がキリストご自身です。この方を信じる信仰によって義と認められ、永遠のいのちに至るといふ栄光が輝いています。ちょうどこれは、例えば、夜の星々がありますが、日が昇ることによって、星々の光が消えていくようなものです。光はあるのですが、それ以上の光によって見えなくなるのです。それが、消え去るべきものの栄光と呼ばれていて、永続するものの栄光がやってきたのです。

3B 覆い 12-18

1C モーセの顔の覆い 12-15

¹² このような望みを抱いているので、私たちはきわめて大胆にふるまいます。

大胆にふるまう、とは、これから話す、自分たちの務めがモーセ以上のものだということです。モーセは、ユダヤ人たちにとって最も偉大な預言者であり、律法を与えた人であり、彼のような預言者が後に現れて、彼がメシアであると信じています。しかし、それよりも大きな栄光のある、新しい契約の仕え人なのだから、かなり大胆なふるまいです。

その大胆さについて、私たちは身に着けてほしいです。福音を恥としないとパウロは言いましたが、どうしても、人々からは見下され、無視されるものなので、自分自身で小さなものであるかのように、心の中にしまっておくような臆病さが身についてしまっています。しかしパウロはテモテに、「Ⅱテモ 1:7 神は私たちに、臆病の霊ではなく、力と愛と慎みの霊を与えてくださいました。」と言いました。力の霊なのです、そして愛の霊であり、慎みの霊です。いつも話している人が、木村清

松という明治の伝道者のことですが、彼がアメリカまで行き、ナイアガラの滝を見せられ、「日本にはこのような滝はないでしょう。」と言われたのですが、「これは、私のお父さんのものだ」と言ったということです。なぜなら、自分はキリストにあって、天地創造の神の子どもになっているからです。その福音のすばらしさについて日々、感動して生きているので、そのような大胆さが与えられていたのです。福音を恥としないようにしましょう。

¹³ モーセのようなことはしません。彼は、消え去るものの最後をイスラエルの子らに見せないように、自分の顔に覆いを掛けました。

これは午前礼拝において説明しました。彼がシナイ山で、主と語っていたために、顔が光っていました。そして、イスラエル人の前で覆いをかけていたのですが、それはその光がイスラエル人にまぶしいから覆いをかけたのではなく、その光がどんどん消え去っていくからです。それを見られたくないの、次に主に会うまでは覆いを外さなかったのです。神の栄光で輝いている顔を見せ続けたいのですが、限界があり、それで覆いをつけていました。そこに律法の限界があるのです。神の栄光はあるのですが、消え去っていくという限界です。

¹⁴ しかし、イスラエルの子らの理解は鈍くなりました。今日に至るまで、古い契約が朗読される時には、同じ覆いが掛けられたままで、取りのけられていません。それはキリストによって取り除かれるものだからです。¹⁵ 確かに今日まで、モーセの書が朗読されるときはいつでも、彼らの心には覆いが掛かっています。

パウロは一気に、モーセの覆いから、ユダヤ教の会堂(シナゴーク)における霊的な状況を話しています。モーセの律法が、朗読されます。世界中どここのシナゴークにいても、決められた朗読の箇所があって、それが読まれます。イエス様が言われましたね、弟子たちに、律法や預言にあるものが、ご自身の苦しみについて証しているものであることを説き明かされました。キリストによって、律法は完成するのです。そのことが分からないままで、律法の朗読がされています。そのため、心には覆いがかかったままになっていて、真理への悟りがないのです。

これは、今でも実体験できます。ユダヤ人の人、しかもイスラエルの人に私が初めて会ったのは、グアムに行く飛行機の中でした。隣に座っていた女性がイスラエルからの人でした。私はすぐに、自分がクリスチャンであることを告げ、聖書を信じている、ユダヤ人は神の民ですとか、喜んで話していたのですが、彼女は一言、「私は宗教的ではありません。」でした。今となつては、イスラエル人の圧倒的な人数は世俗派と言われる人々で、習慣としてユダヤ教の一部は実践しますが、ちょうど日本人が神道や仏教の儀式に参加するのと同じで、特に本気で信じているわけではありません。けれども、そうした彼らを見ていると、見事に聖書の預言を実現させていくようなことをやっていくんですね。イスラエル建国のために働き、またイスラエルの地に木々を植え、農作物を砂

漠で育て、花々が咲き乱れます。イザヤの預言にある通りです。

そして、宗教的な人々、正統派や超正統派の人々がいます。聖書については、詳しく知っています。けれども、キリストについての預言や律法について、見事に見えていません。最も大きいのは、血を流すことによる罪の赦しです。今のユダヤ教は、神殿がないので動物のいけにえを献げません。ですから、神に近づくのにどうしているのですか？ということなのですが、「良い行い」です。贖罪日、ヨム・キプールにおいては、良い行いが悪い行いよりも多いことを期待して、悪い行いについては悔い改めるようにしているようです。ええっ？それは無理でしょう、と私たちは思いますね。悪い行いのほうが圧倒的に多いし、良い行いと思っていることでも神の前では不潔の着物であると、イザヤは預言しています。ですから、血による清めが必要で、大祭司は血を携えて至聖所に入るのです。

イスラエル旅行に行き、ガイドさんに聞くともっと内情が見えてきます。今、福音派の信者、つまり、私たちのように聖書を神のことばと信じて生きている人々が注目されているようです。正統派の人たちであっても、ラビの伝統ばかりを気にして、実際に聖書が何と言っているのかが知らないということもあるようです。そして、ユダヤ人を愛し、イスラエルで働いているキリスト者の人たちがいますね。ユダヤ教徒の人々と親交を深めている人々がいます。そしてそこで、聖書を一緒に読んで分かち合うのですが、彼らは驚くのだそうです。「なんで、そんなに分かるの？」と。キリスト者には、御霊が与えられていますからね、と、その働きに従事しているクリスチャンの方が教えてくれました。ここです、「御霊によって」なのです。

2C 鏡に映される主の栄光 16-18

¹⁶ しかし、人が主に立ち返るなら、いつでもその覆いは除かれます。¹⁷ 主は御霊です。そして、主の御霊がおられるところには自由があります。

ここです！イエス・キリストを信じるだけの自由が私たちにあります。いろいろな規則や方法に頼むのではなく、ただ、この方に立ち返るならば、どんなことをしても決して取り除けられない覆いが取り除けられるのです。主は、御霊によってすぐに働いて下さり、しかも自由に働いてくださいます。

私が、信じる前に高校生の時に抑うつであったことは、よくお話しております。信仰をもって、しばらくしてから自殺願望が消えました。自分が良くなろうとするのをやめて、ただ、このからだをあなたに明け渡しますとして、イエス様を仰ぎ見ただけでした。自分が悩んでいる時、気落ちしている時、ただイエス様が共におられました。それが癒しでした。そのことを、あるテレビ番組で証したことがあります。その後、見た方から相談がありました。同じように若い息子さんが、鬱で悩んでいるけれども、どうすればよいのですかと。私は、「イエス様を見てください」としか言えなかったのです。もちろん、そのお母さんは、あらゆる努力をしていると思うし、もしかしたら病院にも連れ

で行っているかもしれないし、そういったことを否定しないのです。けれども、自分に死んで、ただイエス様を仰ぎ見るしかないのです。いや、その一步を踏めば、「いつでもその覆いは除かれます」という約束があるのです。

こうすればこうなるのだ、というような律法主義は、キリスト教会の中にも巧妙に入ってきます。そして、御霊のおられるところには自由があるという、こんなすばらしい約束があるのに、何かのやり方や、プログラムに取り組ませて、ただイエス様のところに行けばよいという、シンプルな福音から引き離してしまうのです。

¹⁸ 私たちはみな、覆いを取り除かれた顔に、鏡のように主の栄光を映しつつ、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられていきます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。

モーセの律法と何という違いでしょうか！モーセは、消え去っていく栄光を見られないようにして覆いをつけました。けれども、キリスト者はみな、覆いを付ける必要がありません。消え去ることはないからです！自分が主に向くならば、その栄光を見ます。そして栄光を見たならば、鏡のように、自分自身がなって、自分から主の栄光を反射します。そして、消え去ることはなく、むしろ栄光から栄光へと導かれます。その間に、主の似姿へ変えられます。

この不思議は御霊がしてくださいます。どうか、この自由な御霊の働きにゆだねて行きましょう。自分で何とかしようとするれば、そこで肉が働き、みことばを見れば旧約時代の律法のように、ますます自分の中で悶え苦しみます。そうではなく、ただ主を呼び求めるのです。主を仰ぎ見るのです。主が御霊ですから、御霊が栄光から栄光へと、主の似姿へと変えて行ってくださるのです。